
リリカルなのは～グランガイツの息子～

れおん

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

リリカルなのは〜グランガイツの息子〜

【Nコード】

N8206Y

【作者名】

れおん

【あらすじ】

リリカルなのはの二次小説

オリ主が嫌いな人は遠慮してください

第一話（前書き）

前回の作品を消してしまった（続き）ので新しく書きました

第一話

ハルトSide

「おはよう、公開意見陳述会まで残すところあと7日だ。地上本部に色々な世界の重鎮が集まってくる。正直非常に面倒だが仕事は仕事だ。各自与えられた仕事をしっかりこなすように。以上だ、解散！！」

朝の朝礼を終わらせて部隊長室に向かった。

「ゲンヤさん、はつきり言ってあれって絶対あんたの仕事ですよね？」

「まあいいじゃねえか。お前が面倒だからって受けてない魔導士ラシクの試験ごまかしてやってるんだから」

「あ、ま、仕方ないか」

「わかりました。この事は触れないでおきましょう。ギンガも6課に出向させたらいいですね。どうするんですか？俺たちのメシ。」

俺は基本的にゲンヤさんの家でメシを食わせてもらっている。

「しらん。お前の彼女に作ってもらえ、俺は自分の分くらい作れる。」

「地獄に落ちろ！！」

そう言い残し俺は部屋を飛び出した。

まだ朝メシ食ってないのに

とりあえず、向こうが忙しくて無理な事はわかっているがとりあえず連絡してみた。

「あゝもしもし？はやて、今時間ある？実はさ今日の晩飯がないってことが今決定しちゃったんだよ。え？6課にメシ食べに行っているの？ありがとう！！」

メシ確保が決定したので仕事に戻ることにした。

「今日の仕事はこれで終わり、今日は出動もなく無事終わったな」

そして今俺は部隊長室に来ている「失礼します、ゲンヤナカジマ部隊長殿、今から出向させたギンガの様子を見てきます。」

「んで本当のところは？」

「なんかはやてが6課でメシ食わせてくれるっていうからちよつと行ってくるわ。じゃあな!!」

車庫に入ってた俺のバイクに乗って6課の隊舎に向かった

「もしもし？ギンガか？実は今からそっちに行くんだけどさちよつと遅くなるってはやてに言っておいてくれる？あ、理由？ヘルメット忘れて管理局に追っかけられてるから撒いたらそっちに向かう。じゃよろしく。」

ギンガSide

「あれ？もしもし？もしもし…きれた。」

ハルトさんからの電話は一方的にきられた

「ギンガ、どないしたん？」

ちようどはやてさんが歩いてきた「あ、はやてさん実は今ハルトさんから電話があってヘルメット忘れて管理局に追っかけられてるから撒いたらこっちに来るそうです。」

「はあゝハルトって副隊長になってもなんもかわらんなあ。後でちよつとお話しなあかんかもな。管理局の人間が管理局に捕まるって絶対あかんやん!!」

「はやてさん、前から聞きたかったんですけどハルトさんのどこを好きになったんですか？」

「ここでその話はあかんよ!!…誰も聞いてなかったやろか？」

辺りを見回すはやてさん、あれ？今スバル達がいたような、教えた方がいいのかな？でもまあいっか別に悪いことじゃないし。

私はスバルを見なかったことにした
数十分後

「八神部隊長、お客様がお見えになりました。」

ハルトさんやつと着いたんだ。

「ほなちよつと迎えに行ってくるわ。ギンガご飯運んどいてくれる？」

「わかりました。」

はやてさんは歩いて迎えに行った

「なあギンガさつきはやてと話していたのって誰の事だ？もしかしてはやてに彼氏がいるのか？」

ヴィータさんがいきなり聞いてきた

「ヴィータさんまで聞いてたんですか？」

「で、本当のところはどうなの？」

フェイトさん：まあ小さな頃からの親友だったって聞くし興味あるのかな？

「今から来る人にそれを聞いてみたらどうですか？」

ちようど私がそうだった時にははやてさんが戻って来た

ハルトさん頬つぺた真っ赤だ

「どうも陸士108部隊副隊長のハルトⅡグランガイツだ、今日は本日から出向するギンガナカジマとその妹のスバルの様子を見に来た。ついでに晩ご飯をご馳走になる。よろしく!!」

「グランガイツと言うとゼストⅡグランガイツの息子か？」

シグナムさんが尋ねた

「ん？なんだ親父のこと知ってんのか」

「ああ地上ではかなりの有名な人だからな。」

「まあ8年も前に死んじまったよ。武人だから不器用な人だった、湿っぽくなっちゃったな、すまない。何か他に聞きたい事あるか？」

「は、はい。ハルトさんどうして頬つぺたが真っ赤になってるんですか？」

エリオが勇気を出して質問に行った。

「これはな……交通ルールをまもらなかった結果だ。」

嘘だ。ルールを守らなかったのは本当だけど絶対はやてさんにビン

タされてる

「はぁーい、次はリインの番です。はやてちゃんとはどういう関係なのですか？」

多分この場にいる全員が一番聞きたかった質問だと思う、私は知ってるけど

「婚約者で（スパァーン）すみません、本当は『108部隊におつた時の同期や』です。」

神業的なタイミングでかぶせた！！「グランガイツ、私と一つ模擬戦をしてみないか？」

「明日の朝でいいですか？俺そこら辺で寝とくんで、それより先に晩ご飯を頂きたいんだが。」

そう言い残しハルトさんはご飯を取りに行った

「ねえ、ギン姉、本当はどうなの？あの二人って、」

スバルがよって来て聞きにきた

「他の人に言っちゃダメよ？本当は3年前から付き合ってるらしいの。」

「やっぱり付き合ってたんだね」スバルだけが聞いていると油断していたらみんなに聞かれていた

ハルトさんはご飯を食ってるしその横で楽しそうに話しているはやてさん、あの二人をみたら誰だってわかる気がするけど。

「あの男は強いのか？」

「それが私ハルトさんが戦っているの見たことないんです。登録は陸戦S十だけどこまかしているって言うか試験をさぼってて本当はSSS十って言ってたし、ただ武器は剣らしいです。後は魔力量が異常に少ないらしいです。」

「魔力量が少ないのにS十ってかなり凄いいんじゃないですか？」

「それも嘘じゃねえのか？」

ヴィータさんが刺のある言葉を投げ掛ける

「それは全て明日の模擬戦でわかることだ」

明日に備えて私達は先に部屋に戻った。

ハルトSide

現在俺はメシを食べおわり隊舎の外をはやてと歩いている

「なあはやて、公開意見陳述会の前日に会えないか？警備で来るんだろ？どうしても伝えておきたいことがあるんだ。」

「それは今じゃあかんの？」

「今じゃダメなんだ。いいか？」「かまへんよ。」

「ありがとう！！それにしてもはやてが部隊作ってもう半年くらいたつのか？早いもんだな。」

「そうやね、でも私一人じゃここまでこれなかった。なのはちゃんにフェイトちゃん他にも色んな人の協力があつてこの部隊は成り立ってるんや。」

「そっか、じゃあ俺も明日の模擬戦本気でやるかな。」

「ケガさせたらあかんよ？」

「善処するさ。：よし、隊舎に戻るか、俺はどこで寝たらいいんだ？」

正直食堂ではさすがに寝れない

「ほなわたしの部屋で寝る？」

「俺は今さらって感じだから構わないがお前の部隊長としての立場悪くなるんじゃないのか？男を連れ込んだとかで。」

「ほんまやなあ。じゃあ部隊長室と一緒に寝よか、ここやったら万が一人にみつかったも言い訳できるし。」

まあはやてがいいならいいか

「別にはやては部屋で寝てもいいんだぞ？」

「あかんよ、だってこうして直接会ったのも久しぶりやのにちよつとくらい一緒にいたいやん。」

「じゃあ行くか、大事なお姫様に風邪引かれたら困るしな。」

「そう思うてるんやったら、もっとこまめに連絡入れたらどうや？お姫様攫われてまうかもしれんで？」

微笑みながらそう言うはやて

「もし、そんな事になったらとえ次元世界の最果てだったとしても助けに行って見せるさ。」

「頼りにしてるでおうじ様!!」

はやてが後ろから抱きついてきた俺はそのままはやてを背負って部隊長室に向かった。

外は肌寒かった筈なのに全く寒くない

この笑顔を守る為なら俺は命をかけて見せるさ

心の中でそう決心した

その日はそのまま部隊長のソファで二人で寝た。

第一話（後書き）

感想くれると嬉しいです

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8206y/>

リリカルなのは～グランガイツの息子～

2011年11月24日13時49分発行